
複合辞「からには」「以上」の相違に関する一考察

——BCCWJを資料としたコーパス分析——

趙 海城

1. はじめに

本稿では、因果関係を表すことの多い類似した意味を持つ複合辞「からには」「以上」を考察対象とし、両者の使用ジャンルの違いから見た異同点、前接成分、すなわち両者が用いられる従属節の述語に見られる相違、主節の共起制限といった文法的振る舞いの相違から、「からには」「以上」両者の意味的特徴の相違点を明らかにすることを目的とする。

次の例(1)では、「からには」「以上」両方を用いることが可能で、意味的相違がさほど感じられない。一方、例(2)では、「以上」を用いることが可能だが、「からには」を用いると非文法的になる。

(1) 代表に選ばれた {以上／からには}、ベストを尽くせ。

(2) 部長が帰った {以上／*からには}、中止しよう。

【日本語記述文法研究会(2008)】

では、どのような意味において、両者が類似し、どのような意味で両者に相違が見られるか、学習者への日本語教育の見地からも、典型例を提示して説明することが求められる。そのため、具体的な使用状況を見て実証的に両者の異同点を示していく必要がある。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 先行研究

「からには」「以上」を扱った研究としては、中里(1997)、毛(2004)、泉原(2007)、岡本・氏原(2008)、日本語記述文法研究会(2008)、長野(2012)、馬(2013)などがある。

岡本・氏原(2008:31, 32)は「以上」を以下の三つの意味を表すと分類した上、「からには」との言い換え可能性とニュアンスの違いを指摘している。

意味1：A だったら当然 B と、B で一般論や話し手の意思を表す。

意味2：A という状態・身分・立場の場合、当然 B となるべきだ、はずだ。

意味3：「A ない以上」の形で、A ない状態が続くのなら、B の状態も続く。

意味1の場合は、「からには」にはほ言い換え可能だが、「A 以上」は規則や建前を述べるのにも使うのに対し、「A からには」には話し手の感情や意気込みが感じられる。意味2と意味3の場合も、「A からには B」に言い換え可能だが、「A からには B」は個人的な気持ちが強く感じられる。

一方、「からには」は以下の二つの意味を持っているとまとめている（岡本・氏原（2008：69、70））。

① A と決心した / A したのだから、B をするのは当然のことだ。B には覚悟を迫る表現や個人的感情を表す文が来る。

・オリンピックに出場するからには、何が何でも金メダルを取りたい。

② A を前提としたら、当然 B となる。

・医者であるからには、患者の命を助ける義務がある。

日本語記述文法研究会（2008：130、131）における「からには」「以上」についての記述を次の表1のようにまとめられる。

表1 日本語記述文法研究会（2008）の記述のまとめ

	からには	以上
共通点	従属節の事態を確かな事実として示し、そこから必然的に導き出されるものとして主節の事態を示すという特徴をもつ	
	主節の事態には、命令や依頼、意志や希望など行為要求を表す表現がよく現れる また、主節に、必然的な判断が現れることもある 主節にモダリティ形式がなくても、行為要求や意志、判断の内容が表されていればよい	
	従属節の事態が、主節の事態の原因・理由とは考えにくいものもある ・やる（からには / 以上）、真剣にやれ ・出場する（からには / 以上）、優勝したい	
相違点	従属節の述語はほとんど動詞で、否定形は現れにくい	従属節の述語は動詞か、名詞+であるが多く、否定形も現れる
	一般常識として認められる因果関係 約束した（からには / 以上）、やり遂げよう	一般常識的な因果関係でなくてもいい 部長が帰った（*からには / 以上）、中止しよう
		かたい文体でよく用いられる

中里（1997）は、「には」「からには」「以上」三者の意味用法の違いを考察している。中里（1997）は「からには」「以上」について、前件と後件の意味関係、前件・後件を結びつける際に意識される主観性や前件・後件それぞれの意味上、文体上の制限について考察し、両者の相違点をまとめている。

表2 中里（1997）の記述のまとめ

	A からには B	A 以上 B
共通点	① A が成立した場合、A を根拠に B が必ず成立することを表す	
	② A が成立した場合、A のさらに進んだ段階（または最終段階）の B が成立することを表す	

	③ BにAの根拠を示す	③ ([A ない以上 B ない]などの形で)Aが成立しないことが理由となって次の段階Bに進めないことを表す
相違点	①、②では、後件は義務、意志、推量、禁止の表現が多い、 <u>前件がプラスおよび中立的な内容のとき後件は期待性の内容となる</u>	③の前件は、話し手の力ではどうにもならない事柄、話し手は受け身の立場
	前件と後件を結び付けるのは <u>話し手の主観</u>	前件と後件を結び付けるのは <u>話し手の主観を超えた必然性</u>
	前件と後件の因果関係に重点を置く	事柄が成立する段階に重点を置く

以上の先行研究における「からには」、「以上」両者の相違についての記述は、次の表3のようにまとめられよう。

表3 先行研究のまとめ

	A からには B	A 以上 B
上接成分の文法的形式	否定形が現れにくい	否定形が現れることもある
意味的	一般常識としての因果関係	一般常識としての因果関係でなくてもいい
意味的	話し手の感情や意気込み、個人的な気持ちが強く感じられる	規則や建前
意味的	前件と後件を結び付けるのは話し手の主観	前件と後件を結び付けるのは話し手の主観を超えた必然性
重点を置く時点	前件と後件の因果関係に重点を置く	事柄が成立する段階に重点を置く
文体	言及なし	硬い文体でよく使われる、会話体が主となるシナリオには使われにくい

2.2 問題の所在

先行研究における指摘は直感では納得できるが、しかしそれらの指摘はほとんどコーパスなどによる検証を経ておらず、内省による考察に留まっている。内省による考察が日本語の実態を反映しているという保証はなく、実際にはどのように使われているのか、実証的に示す必要がある。また、日本語学習の面においても、学習者には抽象的な意味記述の説明より、典型的な使用文脈、使用パターンを提示することにより、より効率よく習得できると思われる。そこで、本稿では「からには」「以上」両者の使用ジャンルの違い、前接成分の異同、主節の共起制限の相違といった文法的振舞いから、両者の相違点を検討したい。

3. 調査資料と調査方法

調査資料：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ と略し、データバージョンは 1.1）を使用した。BCCWJ は短単位語数約 1 億 490 万語で、長単位語数で言うと約 8358 万語である。今回これらすべてを検索対象とした。

調査方法：「中納言」（2.2.2.2）を利用して、「長単位検索」を行った。キーを未指定で、後方共起はキーから一語で、語彙素で「からには」「以上」に指定した¹⁾²⁾。収集したデー

タからゴミ（例：以上に、以上の、など）を排除した結果、「からには」は399例、「以上」は2316例得られた。「以上」は「からには」の約5.8倍使われていることが分かる。なお、「以上」の用例数には「以上は」も含まれる。本稿ではこれらを分析対象とする。

4. 分析と考察

4.1 ジャンル別使用傾向

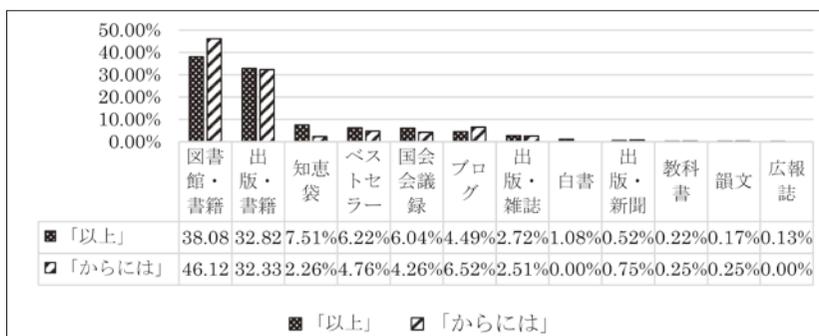


図1 「以上」「からには」のサブコーパス別出現割合

同じ書籍ジャンルではあるが、「図書館・書籍」と「出版・書籍」でやや違う傾向を示している。「図書館・書籍」と「出版・書籍」の日本十進分類法（NDC）による分野別の割合を見てみる（表4）³⁾。両サブコーパスの十進分類の割合で開きが大きいものを見ると、図書館・書籍では文学作品が出版・書籍より12.5%ほど多く、代わりに出版・書籍は図書館・書籍より社会科学、自然科学、技術・工学分野の書籍が多い。文学分野は社会科学、自然科学、技術・工学分野に比べれば、会話体のものが多く、さほど硬くない文章であるため、前件と後件を結び付けるのは話し手の主観で、話し手の感情や意気込み、個人的な気持ちが強く感じられる「からには（46.12%）」がより使われやすい。それで「からには（46.12%）」は「以上（38.08%）」より使用割合がやや高くなっているであろう。

表4 図書館・書籍と出版・書籍の中身の相違

	図書館・書籍	出版・書籍
社会科学	18.4%	24.3%
自然科学	5.6%	9.1%
技術・工学	5.2%	7.9%
文学	38.6%	26.1%

また、ブログ、知恵袋はインターネット上のテキストで、特に第三者の校閲を受けず、自分の考えを記しているという特徴を共通して持っている。しかし、ブログ、知恵袋両者間では相互作用性の有無という点では違いが見られる。ブログは自分の考えを主観的に記した一方通行のテキストであることが多いため、話し手の感情や意気込み、個人的な気持ちが強く感じられる「からには」（6.52%）が多く使われる（>以上（4.49%））。

それに対し、知恵袋は質問者と回答者という参加者がいて、そこには一種の対人の場が生まれ、質問者も回答者もある程度の丁寧さ、改まりをもったやり取りが行われる。また、回答者は規則に基づいて質問に回答し、その回答にも必然的な因果関係がある客観的なものが求められる。それで、「以上」(7.51%)が多く使われているのであろう(>からには(2.26%))。

なお、国会会議録、白書など公的な事柄、規則、ルールを述べる文章では「以上」の使用割合がやや高い。

次に、「以上」「からには」は出版・書籍、図書館・書籍両方合わせて、日本十進分類(NDC)別に100万語当り(PMW)の使用頻度を見してみる。図2から、社会を除いて、ほかの分類には使用頻度にこそばらつきが見られるものの、すべて「からには」の使用頻度が「以上」より高いことが分かる。特に、文学、哲学、芸術において、「からには」の使用頻度が高い。社会分類の中身を見ると、「政治、法律、経済、財政、統計、社会、教育、国防、軍事」⁴⁾のように、話し手の感情や意気込みといった個人的な気持ち、主観が入る文脈より、どちらかという、硬い文体で、規則を述べる文章、前件と後件の必然性を述べる文脈が多い。そのため、「以上」の使用頻度が高くなっていると思われる。

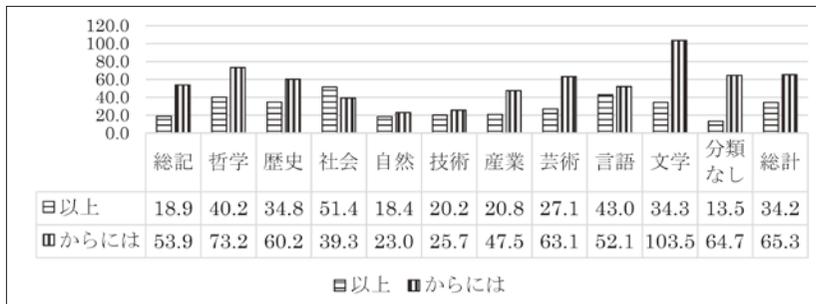


図2 書籍(出版・図書館両方)におけるNDC別100万語当り(PMW)の使用頻度

4.2 上接成分(従属節の述語部分)

4.2.1 「からには」のみ、「以上」のみに上接する成分

まず、「からには」のみ、「以上」のみに上接する成分の上位16位を表5に示す。なお表5には「以上」のみに上接する成分の使用頻度の高い順から並べている。

表5 「からには」のみ、「以上」のみに上接成分(従属節の述語部分)(長単位、語彙素)

「以上」のみに上接		「からには」のみに上接			
	「以上」	頻度↓		「からには」	頻度
1	ている	322		言い出す	2
2	無い	62		てやる	2
3	という	31		尽くす	1
4	する	27		だ	1
5	ます	18		持ち出す	1

6	られる	15	加わる	1
7	てる	14	潜る	1
8	存在する	12	呼び出す	1
9	でない	11	御望み為さる	1
10	ていく	9	出場する	1
11	持つ	6	聞く	1
12	ず	5	申す	1
13	取る	5	誘う	1
14	目指す	5	頂く	1
15	行う	5	陥る	1
16	である	5	描く	1

表5から、「以上」には存在や状態を表す成分(ている、て(い)る、である、存在する)、否定助動詞(でない、ず、)や否定形容詞(無い)とよく共起していることが分かる。よって、「以上」は状態性を持つ事態に多く使われる特徴があると言えよう。「以上」は否定形で使われることがあることが先行研究で指摘されている通りである(例3)。また、「以上」は「れる」(31例)、「られる」(15例)で、受け身で使われる例は合わせて46例見られた。「以上」は感情を伴わない受け身で多用され、話し手の力ではどうにもならない事柄の表出によく用いられ、客観性を出している(例4,5)。一方、「からには」は従属節述語「れる」2例のみである(例6、7)。

(3) 落札してしまった訳ですが、返答がない以上は振込みはしない方が賢明です。

【Yahoo! 知恵袋】

(4) 将来の「あるべき税制」で、国民の税負担増が不可避であると考えられる以上は、1は当然である。

【雑誌『論座』】

(5) 首相が国会の多数派によって選ばれる以上は、与党と行政府との間には党派別もしくは政策上のちがいはない。

【『ザ・ジャパニーズ』】

(6) こうした状況が展開されるからには、スポーツ界の組織、競技会の運営に、マネジメントの機能が存分に働いているのは、想像に難しくなかった。

【杉山茂他『スポーツマネジメントの時代を迎えて』】

(7) そういう出方をされるからには、進んで道を譲ることはないと思つた。

【笹沢左保『剣士燃え尽きて死す』】

次に、「からには」「以上」両方に上接する成分を見ていく。

4.2.2 「からには」「以上」両方に上接する成分

表6 「からには」「以上」両方に上接成分(従属節の述語部分)(長単位、語彙素)

両方と共起	以上	割合(%)	からには	割合(%) ↓
-た	654	28.24	240	60.15
言う	14	0.60	54	13.53
-である	424	18.31	30	7.52

有る	118	5.09	11	2.76
遣る	15	0.65	11	2.76
-ない	189	8.16	5	1.25
書く	4	0.17	5	1.25
-れる	31	1.34	2	0.50
使う	5	0.22	2	0.50
付き合う	2	0.09	2	0.50
居る	27	1.17	1	0.25
成る	8	0.35	1	0.25
立つ	5	0.22	1	0.25
出す	4	0.17	1	0.25
-てもらう	4	0.17	1	0.25
行く	3	0.13	1	0.25
作る	3	0.13	1	0.25
-なければならない	2	0.09	1	0.25
思う	2	0.09	1	0.25

表6は「からには」「以上」両方に上接する成分を「からには」の使用割合の高い順から示したものである。表6から分かるように、両方とも過去・完了助動詞「た」につく例が多く見られる。割合的に見ると、「からには」のほうがより確定的事態を表す「た」につきやすい（「からには」(60.15%) > 「以上」(28.24%)）。これは、先行研究で指摘されているように、従属節事態は主節より以前にすでに実現済みの確定的事態であることが多いためである。

「からには」は、「～いうからには」という慣用句の形で54例使われ、主節が従属節の根拠を示す意味機能をしている（例(8)、(9)）。

「以上」は、否定助動詞「ない」を上接する例（例(10)）、断定助動詞「である」を上接する例が比較的多く見られる（例(11)）。

(8) 「金星というからには、いつも勝てることを意味してはいないのです。」

【大川隆法『常勝の法』】

(9) ディスコというからには、きっと昔のツイストやモンキーダンスをもっと激しくした感じなのだろうと財津は勝手に想像していたのだが、…。

【吉川達也『哀しき檸檬色の密室』】

(10) 法律特有の効果が生じない以上、法律制定の意味がないといえる。

【山口道昭『政策法務入門』】

(11) これは日本の武士である以上誰でもそういう心持はあるのであります。

【中山吉弘『熱きバトルのはて』】

4.3 下接成分（主節成分）

「からには」「以上」を受ける主節における、主節の中でよく使われる文末モダリティ表現、副詞を表7に示し、全体例における使用割合も並記する。また図3には両者の全体における使用割合をグラフに示す。

表7 「からには」「以上」の主節成分

主節成分	以上		からには	
	件数	割合	件数	割合
べきだ	121	5.22%	14	3.51%
なければ(なくては)ならない	106	4.58%	26	6.52%
たい	75	3.24%	19	4.76%
はずだ	57	2.46%	16	4.01%
に違いない	19	0.82%	8	2.01%
てはならない	17	0.73%	3	0.75%
つもりだ	14	0.60%	2	0.50%
てはいけない	8	0.35%	0	0.00%
なければ(なくては)いけない	5	0.22%	8	2.01%
てみせる	2	0.09%	2	0.50%
まい	2	0.09%	5	1.25%
てやる	1	0.04%	4	1.00%
必ず	22	0.95%	2	0.50%
絶対に	10	0.43%	1	0.25%
ぜひ(とも)	4	0.17%	3	0.75%
徹底的に	4	0.17%	1	0.25%

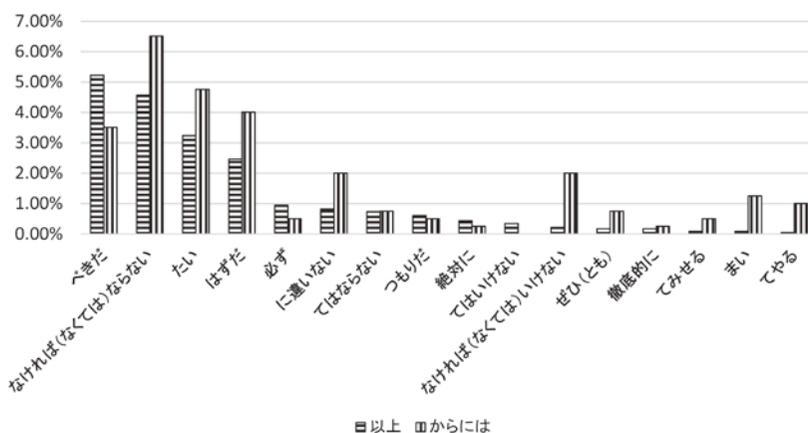


図3 「からには」「以上」の主節成分

表7、図3から分かるように、両者比較の観点から見ると、「以上」は「べきだ、てはいけない、必ず、絶対に」と共起することが多い。これらは外部条件に規制され(求められ)、必然的にやること、絶対にやってはいけないことを示す。一方、「からには」は「なければ(なくては)ならない、なければ(なくては)いけない、はずだ、に違いない、てみせる、てやる(意志)、たい、まい(否定意志)、ぜひとも」と共起することが多く、これらの多様なモダリティ表現が多く使われ、話し手の主観的意志、希望、覚悟を表している。

(12) でも、ここまで深入りした以上、嘘をつき続けなければならない。

【『死を呼ぶペルシュロン』】

(13) ほくが来たからには、今月中に仕上げてみせますよ。

【北尾トロ『銀座八丁目探偵社』】

5. おわりに

本稿では、コーパスから収集したデータを元に、「からには」「以上」の使用ジャンルの違いから見た異同点、前接成分、すなわち両者が用いられる従属節の述語に見られる相違、主節の共起制限といった文法的振る舞いの相違から、「からには」「以上」両者の相違点を見た。本稿は先行研究に負うところが多いが、データを以て両者の違いを示したのが本稿の特徴であろう。両者の意味的特徴の違いについて、用例を基に仔細に分析する必要がある、今後の課題としたい。

注

- 1) 【からには】の検索条件式: 後方共起: (語彙素="からには" AND 品詞 LIKE "助詞 - 接続助詞 %") ON 1 WORDS FROM キー WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="30" AND unit="2" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"
- 2) 【以上】の検索条件式: 後方共起: (語彙素="以上" AND 品詞="名詞 - 普通名詞 - 一般") ON 1 WORDS FROM キー WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="30" AND unit="2" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"
- 3) 出版サブコーパスは生産実態を、図書館サブコーパスは流通実態をそれぞれ反映するものとされている。 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/basic-design.html
- 4) 日本十進分類表 (NDC) 区分表: <http://www.libnet.pref.okayama.jp/shiryoudc/index.htm>

参考文献

- 庵功雄、高梨志乃、中西久美子、山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク
- 泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』、研究社
- 岡本牧子・氏原庸子 (2008) 『くらべてわかる日本語表現文型辞典』、Jリサーチ出版
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 中里理子 (1997) 「順接条件を表す「には」「からには」「以上」」『埼玉短期大学研究紀要』6、pp.115-123
- 長野真澄 (2012) 「日本語教育文法の視点からの文法記述の試み: 複合辞「からには」と「以上は」を例として」『環太平洋大学研究紀要』6、pp.161-167
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 馬紹華 (2013) 「「以上」と「からには」の相違に関する考察」『日本語学論集』9、pp. 189-174
- 毛文偉 (2004) 「「～カラニハ」と「～イジョウ」に関する一考察」『日本学研究—紀念中日邦交正常化三十周年』上海外语教育出版社
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』、角川学芸出版
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

利用したコーパスと検索ツール

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) (2011) 国立国語研究所
長単位検索 Web アプリケーション「中納言」

URL: <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>